

採卵鶏ケージフリー『エイビアリーシステム』について

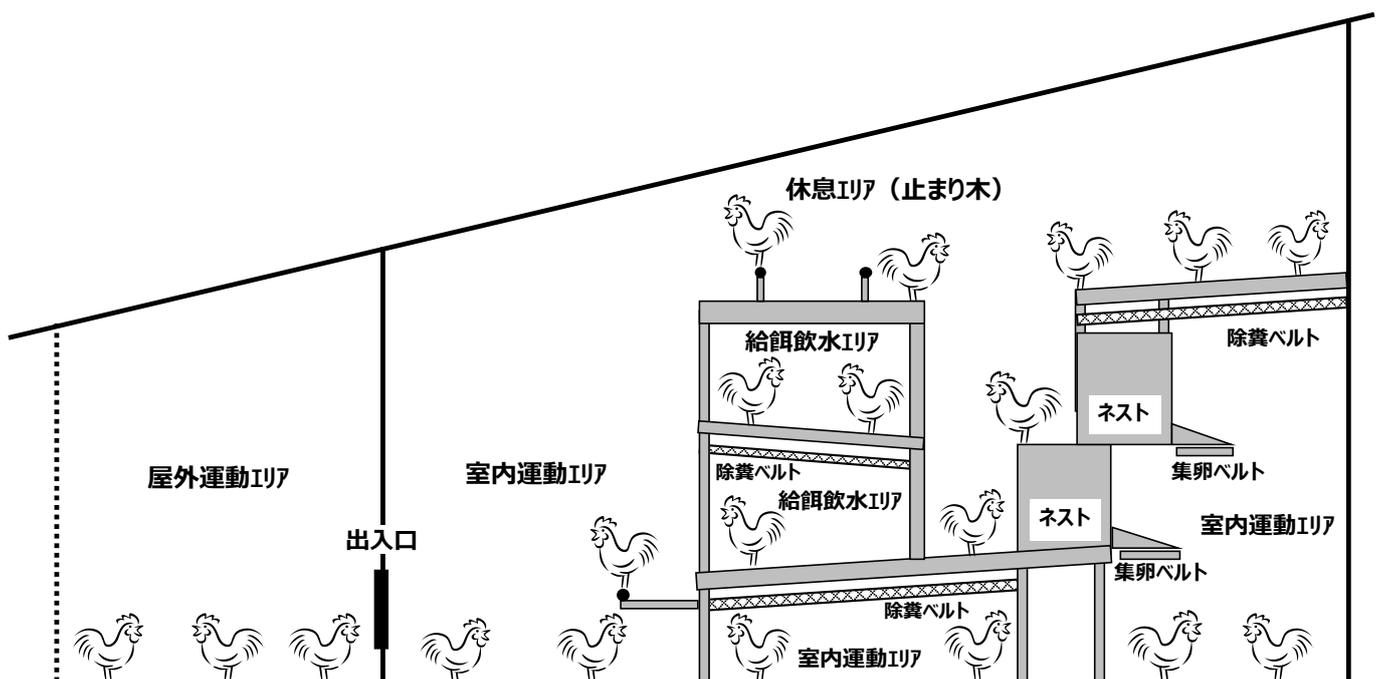
株式会社ナチュラファーム
代表取締役 一柳 憲隆

埼玉県で養鶏場を営む株式会社ナチュラファーム(旧社名・有限会社丸一養鶏場)では、通常ケージ飼育15万羽のほかに、2006年にアジア圏で初めてエイビアリー(直立多段式平飼い)システム成鶏舎の運用を始め、その後、2014年に2棟目、2021年に3棟目と建設、現在では3万羽を飼育しています。

当社のエイビアリーシステムは、3鶏舎ともドイツBig Dutchman社製のナチュラシステムを採用しています。他のシステムメーカーによっても、また建設時期の違う3鶏舎とも、システム形状に若干の違いがありますが、1棟目と比べると、3棟目のエイビアリーシステムは、欧米でのエイビアリーに対する飼育ノウハウが蓄積されて年々進化していますので、各段に使い勝手がよくなっています。しかしながら、当社の3鶏舎ともエイビアリーシステムの管理・運用方法は同じですので、基本的なシステムの仕組みをご紹介します。

当社のエイビアリーシステムは4つの行動エリアに分類されています。休息、睡眠時に鶏が足指でしっかりと掴むことができる「止まり木」がたくさん設置されている『休息エリア』、ニップル飲水による新鮮な水とチェーンフィーダーによる自動給餌により飼料を与える『給餌飲水エリア』、暗室により落ち着いた自然な状態で鶏が産卵できる『産卵(ネスト)エリア』、床下の敷料を足で掻いて寝転んだり、ひっくり返ったりしながら、羽をバサバサ、足をジタバタさせて羽についた汚れを落とす『砂浴び行動』ができる『床下運動エリア』、鶏はすべてのエリアを一切の制限がなく、自由気ままに動きまわることができます。このような環境(システム)で飼育することで、通常のケージ飼育では実現しづらい「鶏本来の行動欲求」を全て満たすことができるため、多少の物音では驚かず、好奇心旺盛で活発な活動をする鶏になります。

これらの行動エリアについては、一般的な平飼い飼育にも当然ありますが、健康かつ快適に飼育するには、大きな課題が2つあります。1つ目は「糞との分離」です。通常ケージ飼育では「フンとニワトリ」、「フンとタマゴ」を容易に分離できるこ



NATURA-NOVA TWIN SYSTEM Big Dutchman社製(ドイツ)

とで、鶏の健康管理と鶏卵の衛生管理が可能となりますが、平飼い飼育では、敷料に糞が蓄積するため、特に高温多湿期では敷料自体が不衛生になることで鶏の疾病発生や、鶏卵の汚染につながる可能性があり、こまめに未利用の敷料と入れ替える必要があります。その点、エイビアリーシステムでは、直立多段式ケージシステムと同様、各段のシステム下に除糞ベルトが設置されており、ボタンひとつで自動的に鶏舎外に搬出されます。またオプションで糞乾装置の設置によって鶏糞の水分調整が可能となり、アンモニア発生を抑制することができます。

しかしながら、除糞ベルトがあっても、鶏がシステム内で糞をしなければ何の役にもたちませんが、システムメーカーの長年のノウハウにより、鶏が自然にシステム内に糞をするよう様々な工夫が施されているため、約80%の鶏糞を除糞ベルトで回収することが可能です。残りの鶏糞は敷料上ということになりますが、鶏糞量が圧倒的に少ないため、高温多湿期でもべたつくことなく、サラサラな敷料を維持することができます。尚、当社ではオールアウトまで敷料の交換は実施していませんし、これまでにコクシジウム症のような病気の発生もありません。

また、鶏卵についてもネストではなく敷料上に産んでしまうことがあります。その鶏卵は当社が導入している『農場HACCP』の方針により、生食用ではなく、全て加熱加工用として出荷しています。「そんなことしたら、生食用で販売する鶏卵が極端に少なくなってしまうのでは？」と思いますが、全く問題はありませぬ。何故かはこのあとお話しします。では、このエイビアリーシステムを採用すれば、だれにでも、すぐにでも運用可能かといえばそう簡単ではありません。一般的な平飼い飼育をされている生産者は、通常ケージで飼育された大雛を導入されていると思います。育成期間をケージで飼育されている雛は、行動制限のない飼育環境で飛んだり、跳ねたり、止まり木に止まるという行動をしたことがないまま成長しているため、大人(大雛)になっていきなり「ご自由にどうぞ！」と行動制限のない環境に放たれてもすぐには「動けない」ことから、その環境に慣れるまでかなりの時間を要します。そして「慣れる」ことに時間がかかりすぎてしまうと、ネスト内で産卵することを覚える前に、床の上に産んでしまう「巢外卵」となります。ネストに産んでいけば容易に鶏卵を集荷できますが、巢外卵の発生が多ければ多いほど、労働者にとって集荷作業が重労働となり、労働生産性も低下します。また、見逃したことで敷料に埋もれてしまった巢外卵を数日経ってから発見した場合、高温多湿期では鮮度劣化に気づかずに生食用として出荷してしまうと重大クレームにつながります。

この巢外卵の発生が、平飼い飼育の2つ目の課題となりますが、当社では育成期においてもエイビアリー専用育成舎を2004年に導入しており、育成期間において、ネスト産卵エリアを除く「鶏本来の行動欲求」を満たすことで、エイビアリー成鶏舎へのスムーズな移行が可能です。育成期間において、すでにシステムに慣れていれば、成鶏舎導入後に覚えることは「卵を産むこと」だけですので、初卵開始前に「鶏本来の行動欲求」により自らの意思でネストに入ることを覚えます。

上記の条件が整えば、敷料上に産んでしまう巢外卵は産卵量の0.5%以下で済みます。例え少量でも発生した巢外卵は生食用として販売したいところですが、敷料の上、もしくは中に埋もれていた鶏卵を労働者が発見した際、今日産卵したものであろうと『推定』はできますが『断定』はできませんので、鶏卵の安全を担保し、安心して生食で食べていただく以上、生食用では販売しない当社独自のルールを設定しています。

敷料上の他にも発生する巢外卵としては、システム内の床に産んでしまう場合もあります。発生量としては、鶏種、日齢、鶏舎形状、照明位置、換気方法によっても変化しますが、順調でも2~5%ほどは産んでしまうことがあります。エイビアリーシステムでは、ケージ飼育の床と同様に勾配がついており、川下側に転がってきた鶏卵を集荷することができます。そして、毎日の点検と集荷、そして農場HACCPに対応した記録を実施することで、安心して生食用として出荷することが可能です。

平飼い飼育における2つの大きな課題は、一般的な平飼い飼育生産者もすでに克服されたうえで安全安心の鶏卵を生産されていますが、エイビアリーシステムは、ケージ飼育と同様に鶏の健康管理と鶏卵の衛生管理をシステムチックに管理することで、欧米、そしてアジアにおけるケージフリー鶏卵の生産拡大に大きく寄与しています。